

からばす



Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

第24号(2010年11月1日発行) CONTENTS

- p1 「同業者」から見たカラ
【緑のサヘル】事務局長 菅川拓也
- p2 村の女性たちとの活動を通して知ったこと
カラ現地スタッフ アワ カンサイ ケイタ
- p3 現地活動報告
 - 保健衛生・病気予防 (p.3)
 - 自然保護活動 (p.5)
 - 識字教育 (p.5)
- p6 秋山 忠正氏の思い出 村上 一枝
- p7 バマコだより マリ現地責任者 シェツキ ジャワラ
- p8 国内活動

「同業者」から見たカラ

【緑のサヘル】事務局長 菅川 拓也

カラの支援者の皆さん、「からばす」愛読者の皆さん、こんにちは。私はNGO「緑のサヘル」で事務局長を務めている菅川と申します。私と村上さんとの出会いは、もう17年前に遡ります。当時私はプロジェクト・コーディネーターとして西アフリカのチャド共和国に常駐していました。そこに村上さんが、わざわざマリ共和国から視察に来て下さったのです。現場視察に同行するうち、偶然二人とも岩手県盛岡市の出身であるばかりか、本家が県内の同じ村にあることが判りました。「まさか日本人がほとんどいない遠いアフリカの地で、同郷の人に会うなんて!」とお互いに驚き、すっかり打ち解けてしまいました。この時以来、お会いすれば「お姉さん」、「お兄さん」と呼び合うほど親しくさせていただいている次第です。



私は西アフリカとそこに暮らす人々が大好きです。ここには素晴らしい伝統や文化があり、人々は互いに助け合いながら生きています。底抜けに明るくたくましい女性たち、智慧に富み慎ましく勤勉な人々、そして強い絆で結ばれた仲の良い家族。時に高度成長前の日本の風景を垣間見、たまらなく懐かしい気持ちになることもあります。おそらく村上さんも同様で、それが活動を続ける理由の一つになっているのではないかと勝手に解釈しています。

ところで、皆さんは西アフリカで活動している日本のNGOは幾つくらいあると思いますか? 西アフリカは遠く、生活様式も習慣も日本とは大きく異なります。また乾季の暑さはとても厳しく、雨季の疾病の多さも脅威です。そして恒常的な停電、断水、砂埃、政情不安。日本人が生きていくには、あまりにも過酷な環境です。ましてやこの地で活動を続けていくことは、並大抵ではありません。実はこうした難しさもあって、西アフリカで活動する日本のNGOを数えるには両手で(ひょっとしたら片手で)足りず、その中でも恒常的に日本人を派遣し続けているのは、おそらくカラと「緑のサヘル」だけでしょう。

「緑のサヘル」は1991年に設立され、現在はブルキナファソ、チャド(政情悪化のため休止中)、タンザニアで活動を行っていますが、当然のことながら活動は常に順風満帆というわけにはいかず、時には頭を抱えたいくなるような問題も起きます。そんな時、私たちに励まし、力を与えてくれるのが、同じ西アフリカの地で頑張っているカラの存在です。皆さんのご存知のとおり、カラは長年にわたってマリの村落で活動を続け、着実に成果を上げ続けて来ました。NGOが一時の派手な活動で話題を呼び、手っ取り早く知名度を上げるのは、それほど難しいことではありません。(次ページへ)

http://ongcara.org/ からばす No.24 2010/11/1 発行

しかし、長年にわたって活動を継続し成果を上げ続けるためには、実に多くのものが要求されます。まず現地の人々や生活に対する熱い思いがなければなりませんし、活動を継続する強固な意志、地道さを厭わない忍耐力を持ち続けなければなりません。また、これらを備えていたとしても、活動が現地の生活の実情に即した、真に必要とされるものでなければ、現地の人々の支持や参加を得ることは出来ません。最悪の場合には、成果を上げどころか活動そのものが宙に浮いてしまい、その継続すら難しいでしょう。カラがこれまで成果を積み上げて来るためには、こうした幾多の難問を根気強く、一つ一つクリアして来なければならなかったはずで、そしてこれが実は奇跡的とも言える偉業であることが、「同業者」である「緑のサヘル」にはよく判るのです。

カラの活動のきめ細かさは、私たちから見ても驚くほどですし、その取り組み姿勢は本当に真面目で堅実です。「からばす」には現地の様子が詳細に報告されており、活動に携わるスタッフや村々の女性たちの姿が生生きと描かれています。そしてそこには現地で日々起こる出来事や事件、問題も包み隠さずに語られています。こうした正直さや現地との距離の近さもカラの大きな魅力ですし、これこそが本当の「顔の見える援助」ではないかと思うのです。皆さん、「カラ=西アフリカ農村自立協力会」は間違いなく日本でも有数の「本物の」NGOです。他団体の私が口にするのは甚だ僭越であることは重々承知していますが、どうか今後ともカラへの応援をよろしくお願い致します。私たち「緑のサヘル」も精進を重ね、これからもお互いに励まし合って行けるよう頑張りたいと思います。

2010年9月26日 プルキナファンにて

村の女性たちとの活動を通して知ったこと カラ現地スタッフ アワ カンサイ ケイタ

2008年10月からトウグニコミュン地域の衛生環境改善(JICA事業)担当として、地域の女性たちと共に事業を進めている。以前から、女性適正技術事業の指導者としても活動を行い、技術指導外でも女性の日常生活や家庭内での問題、子供の教育や栄養等、また病気について多くの問題に出会い、その都度私の知っていることを説明してきた。女性たちへ経済力を身に付けることが重要であることも指導してきた。

20年前に比べると、女性は女性適正技術や野菜栽培から個人的に収入を得ることが出来るようになり、小事業の資金としての活用も考えるようになった。今回のJICA事業を進めていくうちに、文字を書けなく読めない女性たちではあるが、彼女たちの持つ潜在的な能力の高さに改めて気がついた。

しかし、その能力が発揮され有効に活かされるには、まだまだ先のことであったと感じた。この素晴らしい女性の力が十分に発揮出来ない理由について考えた。

その第一は、男性には非常に保守的な考えが根強く、女性は子供を育て、働くだけで充分であり奴隷であると考えている男性が多い。また部族によって家庭のあり方や女性の立場についての考え方が違い、エゴイスティックな考えを固守していることが多い。

次に考えられることは、生活が古くからの慣習に左右されていることである。それが根強く残り日常生活を支配していることである。このようなことが女性の発展を妨げる主な原因となっているように思う。

であるから能力のある女性たちを多く見ていると、同姓の身にとって非常に悲しくなってくる。しかし、今回このJICA事業のように村から選ばれた女性5人が一つのグループ(KMT)として活動の中心に存在し、学んだ知識を広く発揮できるので同じ女性として非常に嬉しく満足している。学んだ知識を村で披露して指導的立場になった女性たちは、今までに私が見たことが無く、聞いたことの無い能力を発揮しているようである。これらのメンバーの夫たちはきっと妻を誇りに思っていると思う。事実学習会にはバイクで送り迎えする夫もいる。余談ではあるが、私の場合も主人とは部族が異なり意識の違いが大きくて苦勞することも度々である。そ

して夫も私もカラのスタッフであり同僚であるわけで、外面的にはカラの理念を理解し、男性、女性スタッフの区別無く事業に携わることを理解しているつもりでいるらしいが、事実はそうはいかなく、カラのミーティングでも多少の問題を起こしていることもある。

今回のJICA事業の様に、女性を対象としての事業の進行を私が進めていくよう、代表から言い渡された時には、村の女性の立場を知っているので、うまくいくかと困惑していたが、私は挑戦してみる気持ちが大きかった。事業の初期段階として、保健コーディネーターの勉強をしていくうちに、今まで女性として知らないことがいかに多く、反省する毎日であった。同時に学校に行ったことがない村の女性たちでも、私の指導の仕方で、彼女たちが知識を知り努力すれば、より良い生活環境へ改善が出来るのではないかと思い勇気が湧いてきた。

研修終了後は村へ戻り張り切って事業に取り組み、現在まで計画の半分をこなして来たと思っている。しかし事業を進めていく内に、多くの村で、女性指導グループもうまくいき、予想外に男性の意識を目覚めさせた村もあるが、全くそのようではなく、学ぶ為に金銭を請求し、協働の作業を拒否して個人の収入を得ることなら働く、という村が出てきた。このような村へ今後はどの様に対処していくかが大きな問題となってきた。まだまだ事業は続くので、女性たちは私の指導方法でどのようにでも変わっていくようであり、責任の大きさを感じている。今後、村の女性たちの能力が発揮され、栄養が改善され、村が清潔になり、人々の病気が少なくなっていくのを見るのが楽しみである。



日本人視察団員の男性と適正技術教室の女性たち。写真前列に居るのがアワ カンサイ。

現地活動報告

2010年4月～2010年10月

4・5・6月の猛暑に比べて7・8月は涼しい日が続き地域的な大雨に見舞われました。そのため村間をつなぐ道路も決壊し、往来が出来なく7・8・9月の活動は休止状態でした。9月に計画していたエイズ予防活動も10月に延期されました。

保健衛生・病気予防

2年目に入ったKMT(女性が指導する衛生環境改善事業メンバー)の活動は、4月に準備をして5月から2年目事業分の15ヶ村のKMTの研修会が始まりました。5月はモバ村、バリコロ村のKMTが対象で、研修会4日目に大雨が降り、会場がモバ村だったためにバリコロ村の女性は悪路で来ることが出来なく、更にこの雨が作付け時期の開始となり、バリコロ村の村長からしばらく休むと言う届出があり、結局モバ村だけの研修会となり、無事終了しました。しかし、バリコロ村長からの連絡は、研修会への出席を拒否する意味が含まれていました。理由は、単に雨のためだけではなく、元々モバ村とバリコロ村の女性達は非常に仲が悪いということだったのです。スタッフのアワはこの状況を知らなく、活動を説明し賛同を得たので同じグループとして研修会を始めたのです。それなら他の村と組むようにと、思いですが、村間の距離的關係や、今後の活動について便利性を考えてチームを組んだのです。村間には表面には出てこない難しい問題があるようです。このようなバリコロ村の女性にも良心的な人がいて、高齢の3人の女性が自主的に研修を受けに来ました。でもアルファベットを知らなく授業でも「ハア?ハア?」と理解出来ないの、逆にアワは気の毒に思い「もう来なくてもいいから」と丁重に断ったそうです。このように実際に研修会が始まってから知ることが非常に多くありまし

た。研修が終わったKMTが自村で村の人々へ「話し合い学習会」をする時に性病や家族計画、エイズについては話がしにくいので、これらはすべてアシスタントスタッフが説明をしています。一昨年この活動が始まる時の調査不足もあり、反省する事項が数々出てきました。協力的でないと思っていた村が予想外に協力的で熱心だったり、早く研修を受けたいと催促に来る村もあります。

でも何よりも驚いたのは、この事業は女性への研修を主体とし、彼女たちが村の衛生環境を改善することを目的に初めましたが、数ヶ村の男性から同様な研修の申し込みがあり、アワは「これは女性用だからダメ」と断っているのですが、改めて男性のための研修会もプログラムすることを考えています。男尊女卑の社会で男性が興味を持つことは、女性の活動を活性化させる可能性が高く、活動の効果が上がると思います。今まではユニセフの予防接種があっても、理由や何の病気の為かも分からないままに、担当者の言うがままでしたが、この事業が始まり、何の為の予防接種なのか理解できた、と言われ、母親たちは喜んでいているということです。

カラの6人のアシスタント・スタッフはそれぞれが数ヶ村を担当し、KMTの村における学習会に協力していますが、アダマ・クリバリーの担当する村では、同じ内容の学習を月に3回繰り返すことを提案し、KMTへ指示したことが彼のレポートに書いてありました。2009年度の15ヶ村のKMTによる自村での啓蒙・啓発活動の評価結果を見ますと、ベレニコ村では学習会や村民の協働作業をボイコットしてしまったのが分かりました。村の人たちは学習内容を既に知っていると言い、1回だけ学習会に参加して2回目からは全く集まらなく、学習会も村の清掃活動に「金を出せば言う通りにする」と労務賃金を要求してきました。勿論その様なことは受け付けませんからベレニコ村における活動はすべてをボイコットされた状況のままです。しかしKMTの5人の内、3人は暇がある時には掃除をしています。ベレニコ村は若い主婦が非常に多く、個人収入を得ることの出来る野菜栽培や適正技術の仕事には非常に勤勉です。しかし自宅の前や後庭の掃除は確実にやっているということです。

他にこの事業の結果で目立ったことは、自宅出産が減ったこと、避妊薬の注射(効用3ヶ月)を産院に受けに来る女性が増えました。しかし男性の学習会への参加者が非常に少ないのが問題です。この16ヶ村の内、村が団結して働き、常に村が清潔なのは、デメレブグー村とサナマニ村です。しかしデメレブグー村には深井戸が無く清潔な水はありません、動物も洗い物も食事もみんな同じ浅井戸の水です。サナマニ村は以前にセグー方面からニジュール河を渡って移り住んで来た人たちの村です。この村からは、早くエイズの予防活動をしてくれるようにと、要請が来ていますので今回10月に行ないました。小学校も要らない、イスラム学校だけでいい、と言っていた村ですが、今はKMTの活動も活発で、村の人たちの目覚ましい意識の発展を見せている村です。



熱心に活動が続いているサナマニ村KMTの5人のメンバー。

自然保護活動

8月16日、クリコロ町行政機関からマリ共和国独立50周年事業会議への参加要請があり、スタッフのケイタとスマイラが出席しました。これにはクリコロ地域の全コミン長とNGOが全部出席していました。会議では、9月22日のマリ独立記念日のために何か事業を計画をしているのか、ということでした。前触れも無かったので非常に面食らったそうです。国は色々なことを記念事業として計画していますので、NGOにも何か記念となることをするように、ということだったのです。カラは今雨季に出来るだけ多くのローカル種の植栽をしていることを説明しました。対象はキバン村、タマブグー村とコニナブグ村でニュレ、カリテ、ドゥグラ、ジジフィスモーリタニア等です。この地域で活動をしているNGOは13団体ありますが、ローカル種を植栽しているのはカラを含めて2団体だけで、これが非常に評価されたそうです。

近頃は、組織して2年経った森林パトロール隊の活動が目覚しく、彼らは他のコミンから来た無断森林伐採者を厳しく摘発して治水森林局へ連絡し、役人は罰金を伐採者へ通達しています。この活動が森林火災を減少し、村からのローカル種の植栽希望者が増えていることは確かです。時々巡廻するケイタは、一時より小鳥が増え、乾季には火災が非常に減少して下草がたくさん残っているため小動物が増えたと言います。

識字教育

6月から10月まで農繁期で識字学習は休止です。この期間を利用して昨年行った識字教師研修会の反省と、約10年間の研修会を通して何人の識字教師が誕生したか調査しました。2009年には13会場に68ヶ村から288人(男・女各144人)が参加しました。15日間の研修会の最終日にテストを行いました。試験問題は、OHBN(識字教育普及を委託されているマリの機関)作成の国内共通です。この結果、208人(女性91人、男性111人)が試験にパスし、村レベルの識字教師となりました。更に、カラのこれまでの活動地域(トゥグニ地域31村とバブグ村を中心としたクーラコミン及びダウンバコミン57村)を比較すると、旧活動地域のダウンバ地域の教師たちがより良好な成績を取っています。これは活動期間が長かったためと考えます。

今後の課題は、2010年度マリ共和国教育庁発表による初等教育9年(小学校6年、中学校3年を含めて)を卒業して、高等学校への進学資格を得た人の試験(BH:初等教育終了認定資格)の合格者は、トゥグニコミンのトゥグニ中学校が全国一位(国平均29%)で76%、ダウンバコミンのダウンバ中学校が第二位の良好な成績を取ったという報告がありました。これらが成人の識字学習にも影響し、地域でその熱が高まったと言えます。

識字教師研修会への出席もとても積極的になり、特に女性が参加するようになって来たのは大きな変化であると思います。過去の研修会に比べて、今回は女性指導者が一人含まれていることも大きな違いです。母親や父親が識字教室へ通うのが生活の一部のようになりつつあります。また、男性と同じレベルに達したいと思っている女性や、毎年研修会へ参加することを希望している女性が多くなり、女性も向学心が高くなりました。しかし、研究会終了時の基礎的な試験問題を半分も出来なかった人もまだ多く、次年度の研修会は、今回の試験に合格しなかった人と、合格した人を分けて行なう予定です。

秋山 忠正氏の思い出

村上 一枝

私どもカラの活動の大きな支えであった、秋山忠正氏(元協力隊を育てる会理事、元関東鋼線株式会社 会長)が8月16日にお亡くなりになりました。今号は、私事で大変恐縮ですが、氏がカラに数々の思い出を残してくださいましたので、それについて少しご紹介させていただきます。

私と秋山さんは、1989年9月バマコで初めてお会いした時「あなたどなたさんですか？」から始まりました。

私が、まだマディナ村にいた1992年に村を訪ねていただきました。村で私の活動を見てくださって(私を何歳と聞いていらしたか知りませんが)「だてに年は取っていないね」と言ってくださったので、内心嬉しく、アアこれでもいいんだ、このようにしていけばいいんだなー、と思いそれまでの自分の活動に自信がありませんでしたから、とても勇気付けられ「ヨシこの調子で進めて行こう!!」と考えるようになりました。



マディナ村では、設計ミスで使用不可能になってしまった貯水池や、困難な牧畜の事業に真剣に村の人たちと考え、50kmも奥地の村へ視察に出かけて再開発に取り組んで下さいました。しかしこれには巨大な費用がかかりNGOの手には負えないので現実化は出来ませんでした。その後、現在のカラが組織された後は、毎年バブグ村を訪問して下さり、アフリカ人スタッフの質問に答え、日本のお父さんと親しまれていました。牛に出会うと、ゆるめのジーンズで少し腰をかかめてビデオを構え「コマン タレ モー」と言い、近郊の村へ行ったら、村長とお友達になり、長髪が『女性か?男性か?』と聞かれ、村長は宝物の鉄砲を見せてくれたり、第二次世界大戦の時に中国で戦ったと、自慢する長老もいました。村では「ジャポネ チョコロバ(バンバラ語:日本のおじいさん)」と、親しみをこめて人々は呼んでいました。私が日本へ一時帰国して村へ帰ると、必ず「チョコロバは元気か?」と聞かれ、最近までこれは続いています。

最初にバブグ村のカラの事業地にいらしたのは確か1994年だったと思います。当時のバブグ村ではカラが活動を始めたばかりで、村は季節風に地面を剥ぎ取られたようなサツバツとした村でした。村の起源になった大きな手堀の井戸と、壊れたままの2基の手押しポンプの井戸、使用されてはいるが始終壊れる井戸が一基あるだけでした。学校もない、産院や診療所もない、バス停から奥へ4km程歩いてやっとたどり着く村でした。そこで私に「この村は本当に大変だよ、マディナ村とは違うよ」と言って心配していらしたのを今もよく記憶しています。その言葉の通りに本当に大変な村でした(今も簡単には進んでいませんが...)。人々は賃金を出さなければ仕事をしなく、乾季になると「コモ」という祭りが数日あり、男性は数日間ミレットの酒に酔いしれていました。そして夜には、村を深夜まで得体の知れない物体が奇怪な声で練り歩くのです。それが何なのか分かりませんし女性は家から一切出ることが出来なくトイレにも行くことが出来ないのです。また女性がこれを見ると「死ぬ」と言われています。この習慣は多くの村では既に廃止されましたが、未だバブグ村には残っています。そして乾季には食べ物が無くなるのです。このような村でスタートした活動が今は村の若いスタッフによって監督され、小学校まで設立し、村の人たちの意識も少しずつ変わって来たのは「信念を持って貫きなさい」という秋山氏の言葉が常に私の頭にあったからです。

こんなこともありました。ある年バブグ村にボランティアの若い日本女性が来た時、寝る部屋が無かったのです。そこで秋山氏には私の部屋(と言っても土の小屋)でその女性と寝ていただきました。秋山氏は固い竹製のベットで、彼女はセメントの床に、机の下に丸まって寝ていました。「わしを人畜無害と思って村上さんは若い子と寝かせた」と折に触れて笑っていました。とってもあたたかい、やさしい目でした。

常に私たちやアフリカの人たちの目線で接してくだり、勉強になるからと言って他のNGOの活動を見るためにどんな遠くへでも、何度も連れて行って下さったので、私はたくさんの知識を得ることが出来ました。全く分野の違う職業から、開発の勉強もしないままに闇雲にスタートした私にとって、今それがとても生きています。

本当の支援、本質とは何か? 何が重要なのか? リーダーとしてのとるべき道を教えてくださいました。そして今、カラの支えとなってくださっている、多くの素晴らしい人々を残してくださいました。

今私は、感謝の気持ちでいっぱいです。心からありがとうございました、と申し上げます。

カラの現地責任者のジャワラは、「マリを、そしてアフリカを愛してくれてありがとうございました。私たちのおとうさん!!」とご冥福を祈っていました。

合 掌

バ マ コ だより

シェッキ ジャワラ (マリ現地責任者)



久しくカラの会員の皆さまに、私の国マリの状況をお届けしておりませんで、大変失礼いたしました。

近年マリでは雨季が5月から始まり、その後の降雨量が少なく、8月集中して降る傾向にあります。そのため、主食のトウジンヒエの生育が非常に遅く今年も凶作でした。食糧問題は毎年市民に重くのしかかっています。しかしこのような大きな問題を抱えながらマリ政府は9月22日の独立記念日50年目を祝いの為に、何と日本円で約80億円もかけたのです。国民からは猛反対で新聞にも書かれました。国民は「記念碑を建設してもお腹は一杯にならない、マラリアも治らない、それよりも食糧を満たせ、病院を建設しろ、教育費にもっとお金をかけるように、給料の増額を」などと多くをアピールしましたが、政府は聞く耳を持ちませんでした。この資金は、フランスや多くの国から来たものです。また今年同じように50周年を迎えたコードジボアールへもフランスからの資金も申し出があったのですが、コードジボアールは「今そんな祭り騒ぎをすることは出来ない、国の中が大変だから」とこれを拒否しました。このほうが国民感情は満たされます。

ここでマリについて少しの歴史をお話いたします。スーダン帝国であった時代、フランス軍が1878年9月22日に初めて現在のカイ市近くの村ロゴ・サボシレ(Logo sabouciré)を攻め落とし、そこから内陸への侵略が始まりました。この9月22日を1960年の独立時にも尊重し記念日としています。マリ共和国となったのはこの独立した時からで当時の大統領は、モディボケイタ氏でした。独立国となるまで82年間植民地とされていました。ですから侵略が始まってから植民地を経て今年までマリ国は132年の道をたどってきました。

さて、他の今年大きな問題となったのは、学校教育についてでした。1974年以降は子供達の学力が非常に低下したために、大きな会議が開かれました。学力が低下した大きな原因は、指導教師の質が低下したことです。教師数が足りないので大学で勉強した人でなくても教師になっています。そして子供出生率の増加により就学児童に十分な授業が出来なくなったことなどが大きな問題です。又、近年はこれらに加えて教育の普及はいいことですが、CED(開発の為に村立小学校)を地方に開設し(村の意向を聞いて)、不十分な環境で代用教師が指導しているのも原因です。家庭内では、子供は親に反抗し尊敬しなくなりました。親の言うことを聞かないで外でフラフラして風紀が乱れ、勉強をしない子供が増えました。これは家庭内の教育も問題で、親は収入を得るほうに心を配っているのです。学力を向上させる為に昨年の授業から初等教育での授業科目を増やし、試験科目も増えて試験のシステムも複雑になりました。過去には授業や試験の科目は国語、算数、化学だけでしたが、この3教科に加え絵画、世界地理、世界史、体育(注:日本式に、走行タイム・幅跳び・高飛び・投てきの実技)が加わりました。

この結果今年のDEF(1年生から9年生までの初等教育終了認定の試験)合格率は、過去に比べ非常に低く全国平均が32%でした。合格して高等学校や専門の技術学校へ進むことが認定されます。過去の合格率は、国平均が0~50%以上でしたから大変な差がつかしました。しかしトウグニ中学校が78%で全国一位、二位がドンバ中学でこれらはカラが支援した中学校ですから、とても誇りに思っています。しかし、私、ジャワラ一族の出身村で同じくカラの支援のあったマディナ中学校は29%と非常に低かったです。

ATT(現大統領)の優先政策(事業)は、「ATTブグー」と人々が呼んでいる住宅の建設で、これは国中の大きな町に建設され販売されています。住宅も必要ですが、生きて行く基礎の教育事業に多くの資金を投じて貰わないと、いつまでも他からの助けを待つ国でいるようでは、と毎日心配しています。

(日本語訳責:村上)

国内活動

- 4/11 国際ソロプチミスト東京-銀座 認証25周年記念チャリティーコンサートに出展・活動紹介 ホテルオークラ
- 4/29 東京女子大学【園遊会バザー】で活動紹介 東京女子大学
- 5/16 【東京白梅会】で活動紹介 中野サンプラザ
- 6/12・13 【アフリカン・フェスタ2010 in横浜】に参加・活動紹介 横浜市・赤レンガ倉庫イベント広場
- 7/19 【2010せんだい地球フェスタ】にCARA=Help=仙台、カラ本部参加 仙台国際センター
- 8/29 【2010ワンワールドフェスタinいわて】にて活動紹介 一関市花泉町・花と泉の公園
- 9/26 【第21回 三鷹国際交流フェスティバル MISHOP WORLD 2010】にて活動紹介 井の頭恩賜公園・西園
- 9/26 COP10イベント【あま市フレンドシップ3ヶ国体験ひろば ～見て・聞いて・食べて地球を感じよう～】
あま市国際交流協会の方々によりブース内にて活動紹介 愛知・あま市甚目寺町公民館
- 10/10 COP10イベント【地球のいのち・交流ステーション ～未来につなげよう!愛・地球～】にて、あま市国際交流協会の方々と活動紹介 愛・地球博会場
- 10/23 盛岡ふるさと会にて活動紹介
- 10/31 紫波会にて活動紹介

<2010年11月以降の予定>

- 11/7 【第30回 むさしの青空市】に参加・活動紹介 むさしの市民公園
- 11/26 日本女子大学【2010年度桜楓会バザー】に参加・活動紹介 日本女子大学
- 12/12 カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2010】 銀座・十字屋

からばす(Calebasse)-第24号- 2010年11月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589